

三里塚・ジェット闘争貫徹ノ「国鉄35万人体制」粉碎ノ

動労の産業報国会化を許すな

反動的「国鉄問題に関する動労の考え方」(討議試案)を怒りをこめて弾劾する。

全組合員の皆さん!
全国の闘う動労組合員の皆さん!
われわれは、動労「本部」が第四回全国戦術委員長会議(一月二七〜二八日)に提案した「国鉄問題に関する動労の考え方」(討議試案)に、働こう運動の反動的内容を全面的に暴露し、怒りを込めて弾劾する。

動労「本部」はこの提案以降、第五回全国戦術委員長会議(2/10)、全国支部委員長会議(2/19)を開催し、3月5〜6日銚子市で開催する第一一五回定期中央委員会で確認・決定し、「働こう運動」を「動労の勇気ある提言」として対外的にもアピールし、「組織の総力を結集して方針貫徹に向けたい実践に立ちあがる」ことを明らかにしている。

「強大な敵」論、「厳しい冬の時代」論で総屈服を強要する「考え方」の反動性

まず、「国鉄問題に関する動労の考え方」(以下「考え方」と略称する)は、支配階級の体制的危機突破をかけた軍事大国化・改憲攻撃の一環としての国鉄三五万人体制攻撃の激化についてつぎのように「分析」している。

- ① 「厳しい冬の時代のただ中」、「国民の敵」国鉄、「吹き荒れる国鉄解体論」「壊滅攻撃の重包囲網」と、敗北的危機意識のみをことさらに強調する一方、
- ② 「経済危機を脱出し、政治支配体制を一層確立しつつある政府・支配階級」と深刻な危機にたうっている支配階級を全く正反対に強大視・美化して、屈服の論理づくりを行っている。
- ③ そして、このベテンのにしてデータメな「情勢認識」なるものを唯一の根拠にして、「従って、合理化絶対反対や職場からの実力闘争では、もはや太刀うちできない状況にある」と結論をこじつけ、現在、全職場に充満している怒りと反撃への息吹きを憎しみをこめて圧殺してまわろうとしているのである。

動労「本部」革マル反動分子こそは、この間、「貨物安定輸送宣言」や「ぜい肉おとし」など、53・10、55・10における屈服と裏切りの方針でつぎつぎと国鉄合理化に率先協力してきたことは、すでに周知の事実である。そして、この一貫した裏切りの歴史のつみ重ねの上に、今回、個別「検修一万人合理化」「内達一号全面改悪」攻撃への全面屈服の裏切りにとどまらず、この裏切りの歴史の総決算集大成ともいえるべき「動労の階級性・戦闘性を最後の全面圧殺する方針」を組合員に強要しようとしているのである。

厳しい情勢に抗して闘う、そのための方針と展望をこそ創出すべき指導部が、逆に、「情勢は厳しい。だ

から闘うべきではない」という自ら闘争圧殺を押しつけ、戦わずしての屈服を強制しているのである。

動労の産業報国会化を公然と打ち出した「考え方」の反動性

こうした「現状分析」の上に立って、「考え方」はつぎのように明確に「動労の産業報国会化」方針を公然と打ち出している。

- ① 「今、何をなすべきか」―それは、「後退局面における特殊な戦術として、『国鉄の社会的必要論』を前面化させ『労働者の働き度の高める』事によって民営化・分割化を阻止し、職場を守る。」
- ② 「われわれはもっと一生懸命働くから列車を増発せよ」「もっと働くから仕事をよこせ」と「自らのエリを正し」て、当局に要請する。
- ③ 「現在の要員で、所定時間内の作業を高め、国鉄の輸送量を増やす」、「車両運用、要員運用などを当局の要求を入れて前向きに対処」、「国鉄に対する旅客・貨物の利用誘導・需要開発を当局と協力して組合もとりくむ」―その他の事案も、労使共通の立場で前向きに対処する。

これは、動労「本部」革マル反動分子がいかなる言いまわしをしようとも、「組合自らが、当局になりかわって生産性向上運動を率先して行う」方針であり、「動労を産業報国会第一号にする」方針に他ならないことは明白である。もはや労働組合としての階級性の一カケラをも投げすてて、身も心も支配者・当局にさげ尽くしていく、この超反動的な歴史的裏切り方針を3月5〜6日の中央委で機関決定し、組織の総力をあげて実践・貫徹することなどを、断じて許してはならない。それは、動労の完全な死である。

国鉄労働運動を産業報国会に堕落変質させんとする動労「本部」革マル反動分子を、今こそ追放・一掃し動労大改革をなしとげなければならぬ。全国の闘う動労組合員の皆さん! 共に闘おう。